

生物学は存在論的に思考しなかったか？

「生者が屍者と異なるのは、自分自身の行動を自分の意志によるものだと、あとから勝手に考えて自分を欺すだけなのだ」伊藤計劃・円城塔『屍者の帝国』

森 秀樹（兵庫教育大学）

序章 問題提起

ハイデガーは、近代の哲学や諸科学は特定の存在概念に基づく範疇を前提としてしまっていると批判し、根源的な領域へと遡及することで硬直化した概念を問い直すことを試みていた。彼はフッサールの現象学による諸学問の基礎づけという着想を引き継ぎ、時間を地平とする存在概念によって諸学問が前提としている領域の概念性を現象学によって思惟し直そうとすることになっていった(SZ: 45f.)。ハイデガーは、自然科学としての生物学も生の存在論を顧慮してこなかったと批判し、生という概念を存在論的に問い直すことを主張する(SZ:46,194)。

〔生命を〕把握し、解釈できるようになるための順序を考えれば、「生命の学問」としての生物学は……現存在の存在論に基づいている。生命は独自のあり方をしているが、それは本質的に現存在においてのみ接近可能である。(SZ:49f.)

だが、初期ハイデガーは、根源的な領域へと遡及するにあたって、同時代の哲学状況から出発していた。同時代の哲学は、乗り越えられるべきものであると同時に、根源的な領域に至るための手がかりでもあった¹。

ウィリアム・ジェームズとJ・S・ミルは、連合心理学を捨て、心的なものの中には要素の性質の合成からは導出できない独自の性質をもつ高次の複合体 [=heteropathic law] があることを認識した。ミルは『論理学 [体系]』において「心の化学」に至った。スペンサーは、アリストテレスの方向性を現代的な形で再び活かして、心理学を生物学の内に組み込んだ（環境による規定など）。(GA58:214)

近代的な学問論はハーシェルやヒューウェルによって開始された²。その際、彼らは体系化された物理学を自然科学のモデルとみなし、化学や生物学といった他の諸科学もやがてはその体系に還元することができる考えた。ミルは、コントにならって、学問論を精神科学にも拡張しようとした。初期ハイデガーもまた新カント派やディルタイによる精神科学の基礎づけを検討している(GA56/57, GA58, GA59)。ハイデガーはミルの『論理学体系』を学問論の基礎づけとして読み、その中で触れられていた「異結果惹起的(heteropathic)」という概念に目をとめたと思われる。ミルは帰納法を学問の基礎に据えたが、ディルタイはこのことをもってミルが自然科学の方法を精神科学に転用していると批判した(GA56/57: 164, GA20:19)。結局、ハイデガーはミルのこの概念の意義について見過ごしてしまう。

しかし、ミルが思惟しようとしたのは、歴史や状況によって人間のふるまい方が変わるという精神科学に固有な現象であり、それを概念化したのが上記の異結果惹起的法則であった。ミルはこの著作において、要素の性質を合成することによって説明できる場合（力学的法則）と、要素の性質に還元することのできない新しい性質が生じている場合（化学的法則）とを対比する。そして、後者のような法則を異結果惹起的法則と呼び、精神科学の領域の特性を表すものであるとした³。

ハイデガー自身は触れていないが、この異結果惹起的法則はルイスによって「創発的なもの

¹ 例えば、「生の哲学」は従来の硬直化した哲学を批判すると同時に、それ自身固有の概念的枠組みにとらわれており、生の有り方を思惟するための手がかりを与えるものであった(GA59:12ff.)。

² Herschel, John, *Preliminary Discourse on the Study of Natural Philosophy*, 1830, Whewell, William, *History of the Inductive Sciences*, 1837, 1857, Whewell, William, *The Philosophy of the inductive Sciences, Founded Upon Their History*, Vol.1, Vol.2, 1840.

³ Mill, John Stuart, *A System of Logic, Collected Works of John Stuart Mill, Vol. VII: 372, 442.*

(emergent)」として整理され⁴、アレクサンダーに代表される創発主義の源泉となった⁵。そして、ミルとルイスを媒介する役割を果たしたのがスペンサーであった。彼は、生物学における「発展 (development)」という概念に基づいて⁶、心理、社会、倫理といった諸領域の生成について考察し、ベルクソンに影響を及ぼした⁷。ハイデガーは「世界」と「時間」という概念を用いて存在の生起について論じたが、スペンサーは「環境(the surrounding medium)」との関係における「発展」というあり方に基づいて諸学問の基礎づけと分化を考察した。スペンサーがこの着想を得たのはフォン・ベアの生物学を通してであった。

ハイデガーもまた代表的な生物学者としてフォン・ベアに言及している⁸。なるほど、近代自然科学の概念が成立しつつあった19世紀以降の生物学は物理学を模範とする考え方に影響され、機械論的傾向が強かったが、同時に、機械論によっては生を説明できないとする生氣論のような流れも並存していた(SZ: 10)。ハイデガーが挙げている生物学者は概ねその流れに属しており、ハイデガー自身、そこから影響を受けている。ハイデガーは1919年以来、環境世界という概念によって現存在の存在体制を記述してきたが⁹、それに関連して、ユクスキュルやフォン・ベアの名前を挙げている。

ハイデガーにとって生物学はこの問い直しのやり方を暗示してくれるものでもあった。「[生は機械論に還元できないとする] このネガティブな傾向を先導していたのは、機械論に対する戦い、生氣論、生の目的論的考察といったスローガンであった」(GA29/30:278)。ハイデガーは時間を思惟するために、先行する哲学者に問いたずねるが、その代表がアリストテレスであり、中でも彼の生命論に注目していた。このような受容に基づき、『存在と時間』は、現前性に基づく存在論を、時間を地平とする存在論と対比することで、生命という範疇について思惟する枠組みを切り開こうとした。

現前性に基づく存在論が存在一般の意味の地平たる時間の観点から再検討されねばならないというのはもっともである。しかし、生物学は生命という動的なものの本質を探究してきた。そのみならず、ハイデガー自身が彼の時間論を考察するにあたって、生の哲学や生物学にその手がかりを求めていた。だとすれば、ハイデガーによる生物学批判を再検討する必要があるのではないか。

この論考は、ハイデガーによるスペンサーの「見過ごし(Übersehen)」を、フォン・ベアらの発生学を手がかりにして見直すことで、生物学がハイデガーとは別の仕方存在の生成(分化)について思惟してきたことを明らかにする¹⁰。まず、ハイデガーにおける動物と人間との区別とその割り切れ無さを確認する(第一章)。そして、ハイデガーによる生物学批判を吟味することで、ハイデガーの批判の限界を指摘することにする(第二章)。その上で、スペンサーにおける生物学的な哲学を概観することで、ハイデガーにおいてはたどられなかった「生命の存在論」の可能性について考察する(第三章)。最後に、スペンサーに見られる「環境」と「分化」という着想を用いることで、ハイデガーにおける

⁴ Lewes, George Henry, *The Problem of Life and Mind, First Series: The Foundations of a Creed*, 1875: 98.

⁵ Alexander, Samuel, *Space, Time, and Deity, Vol.1, Vol.2* 1920. Haldane, John Scott, *Mechanism, Life and Personality*, 1921. Morgan, Lloyd, *Emergent Evolution*, 1923. Broad, Charlie Dumber, *The Mind and Its Place in Nature*, 1925. 創発主義は複雑系の科学における創発の起源として言及されることもある。Beckermann, Ansgar et al.(ed.), *Emergence or Reduction?*, 1992. Blitz, David, *Emergent Evolution: Qualitative Novelty and the Levels of Reality*, 1992. Bedau, Mark A. et al. (ed.), *Emergence: Contemporary Readings in Philosophy and Science*, 2008. Malaterre, *Les origines de la vie*, 2010. Stephan, Achim, *Emergenz*, 2007, 2016⁴.

⁶ スペンサーは「発展(development)」を「進化(evolution)」をも包括するような概念として考えている。ドイツ語においては Entwicklung がこれに相当するが、この語は「発生」や「進化」をも意味する。ハイデガーも Entwicklungslehre を進化論の意味で用いている。

⁷ Bergson, Henri, *L'évolution créatrice*, 1907, *La Pensée et le movant*, 1934.

⁸ SZ: 78, GA29/30: 402.フォン・ベア自身は少なくとも主著『動物発生学』では環境世界という表現は用いていない。その代わり、彼は Umgebung という語を用いて、胚の発達における部分をとりまく環境について言及している

⁹ ユクスキュルの『環境世界と動物の内的世界』が出版されたのは1905年のことである。フッサールは『イデー I』(1913)において「私の環境世界」という語を用いている。

¹⁰ SZ: 59). „Die ontische Unbestimmtheit dieses Woraufhin darf aber ontologisch nicht übersehen oder gar als Nichts gefaßt werden“ (SZ:279). Vgl. SZ: 59, 274.

「割り切れ無さ」を記述しなおすとともに、彼の思想の転調を位置づけることのできる枠組みを切り開くことを試みる（終章）。

第一章 ハイデガーにおける生物学の受容と動物論

ハイデガーは、一方において、動物論を生を解明するための手がかりとして利用するが、他方において、動物においては不可能なことを示すことによって、人間に独自の「存在論的なあり方 (ontologisch-sein)」を際立たせようとする¹¹。ハイデガーは、初期の「アリストテレス」解釈の時期（第一節）と『存在と時間』以降の諸講義において動物と人間のあり方を対比しているが（第二節）、かえってそこからは動物と人間との区別の「割り切れ無さ」が露わになる（第三節）。

第一節 「アリストテレス解釈」における動物論

ハイデガーは、アリストテレスを生物学者であると同時に、哲学者でもあるとして解釈し、存在の動態を考察するためにアリストテレスの著作を参照している。その読解によれば、生にとって世界とは単なる事実の総体ではなく、生がそれとどう関わるべきかという文脈性を備えたものである (GA18:47)。人間も動物もともに「世界内存在 (Sein-in-der-Welt)」なのである。しかるに、人間と動物とでは世界との出会い方に違いがある。アリストテレスは、動物が音声（記号 $\sigma\mu\epsilon\iota\omicron\nu$ ）による快・苦の看取にとどまるのに対して、人間はロゴスによって善・悪の看取をおこなうと指摘している (GA18:52)。動物にとって音声は快（苦）を約束する示す記号であり、動物の行動を方向づける。ただし、記号とその告知するものとの結びつきは直接的なものに限定される。音声にたよる動物は世界に内在的であり、出来事に対して受動的なのである (GA18:55)。これに対して、「ロゴスをもつ生物 ($\zeta\acute{\omicron}\rho\omicron\nu\ \lambda\acute{o}\gamma\omicron\nu\ \acute{\epsilon}\chi\omicron\nu$)」たる人間はロゴスによって善の考察をなすことができる (GA18: 49f.)。ハイデガーは、人間の善は、何か外部の目標を達成することではなく、人間に固有な存在可能性をよく発揮することにあると解釈し、それを、個々の行為の成否にとらわれることなく、状況の総体において成就するようなあり方としている (GA18: 100f.)。このようにして、世界に受動的に閉じこもっている動物のあり方と、世界との開かれた関係にある人間のあり方とが区別される (GA18:51f.)。

また、アリストテレスは『形而上学』(980a1)において学問の起源を人間の本性に求めているが、その際、人間の本性を動物との対比によって規定している。ハイデガーはこの一節を以下のように翻訳している。

方法 (Verfahren) が形成されるのは、特定の〈～とみなすこと (Dafürnahme)〉 (見解をもつこと (Dafür-Halt)) が時熟し、強い意味で「捉える」という性格をもつようになるときである。しかも、その都度の交渉関係において働いている数多くの勝手が分かっていること (ないしは、なんらかの仕方次第で際立った保持) から、それが時熟するようになるときである。この〈～と見なすこと〉は、交渉的となっている対象との同様な出会いに (ほぼどんな場合でも) 関わっているような、ある特定の一般的なもの (「全体として」) を目指している。 (GA62:21)。

ここで、ハイデガーは、日常的な諸物との関わりが経験として蓄積し、相互作用する中で学問的な知が時熟 (sich zeitigen) するとしている。動物が世界の中での諸対象との相互的な関わり合いの中にとどまるのに対して、人間の場合はその関わり合いの中から、さらに多くの場合に妥当しうるような独自の関わり方を形成するとともに、それを相互に伝え合うことができる。そして、このような形成は、

¹¹ ハイデガーによる動物論は、ハイデガーの思索の変様と呼応しあうように、各時期において力点を変えて展開されるが、おおまかには4つの系列を区別することができる。1) 『存在と時間』に先立つ「アリストテレス解釈」において、人間は「言葉をもつ動物」として規定された。2) 『存在と時間』において、動物は失命するのみであり、人間のみが死を能くすることができるとしている。3) その後、『形而上学の根本諸概念』においては、石の無世界性、動物の世界の乏しさ、人間の世界形成性が対比された (GA29/30)。4) ピュシス論の探求から存在史的思索への移行において大きな役割を果たした「ニーチェ解釈」においては、記憶をめぐる人間と動物の差異、労働をめぐる人間と動物の差異が論じられる (GA46)。この論文においては、1) と 3) の対比に注目することにする。

単なる記憶や表象にとどまらず、そこで得られた経験を一般化して、将来に役立つようにするものであり、試行錯誤や他者との議論を要する。ハイデガーはこのような知の形成のあり方を時熟と表現している。

やがて、ハイデガーは『存在と時間』においてこのような開示性を形成するあり方を「時間性」として解釈し、それが存在理解の地平をなすと考えるようになる。そして、本来の実存における開示性を「～のもとにあることとして、自らに先んじつつ、すでに～の内にある」ことにおいて、(時間性の諸相に)透見的(durchsichtig)となる決意性として規定するようになる。ここではこれを「存在論的なあり方」の「認知モデル」と呼ぶことにする。

しかし、開示性のあり方を決意性として規定してしまうと、動物との差異が意識や意志の有無によって理解される危険性がある¹²。すでに、「アリストテレス解釈」において、ハイデガーはギリシア人は内的観察と外的観察との区別を知らなかったと指摘している(GA18:241)。このことは、人間のあり方を意識や意志といった主観・客観関係から理解することを拒否するものである。ハイデガーは「ロゴスをもつ生物」という規定においてロゴスと人間とを結びつけているエコノに注目する。アリストテレスの『形而上学』(1023a8sq.)の説明によれば、「もつ(ἔχω)」とは「[ある者が] なにものかを自らの自然または自らの衝動に従って処理する」ことや、「それ自らの衝動(ὄρμη)によって或るものが運動したり、行為したりするのを防ぎ止める」ことを意味する(GA18:172)。「もつ」とは諸力の衝動が協働して「一定の存在のあり方を志向する」という事態が生起することなのである(GA18:174)。そうすると、人間における開放性といっても、それは、ピュシスにおける諸力の均衡において成就するものということになる。これを「存在論的なあり方」の「構造モデル」と呼ぶことにする。

第二節 『存在と時間』以降の動物論

『存在と時間』は現存在の時間性が存在一般の地平であるというテーゼを主張しようとしていた。しかし、その現存在は世界の中に投げ込まれ、それによって衝き動かされる存在でもあった。だとしたら、人間による存在の開示が(動物とは異なり)特権的であることはどのようにして、確認されるのか。『存在と時間』以降の諸講義は、このアポリアを解決しようとする試行錯誤であった。そして、『論理学の形而上学的始元諸根拠』(GA26)において、ハイデガーはピュシスに再び注目している。ライプニッツはデカルトの機械論的生物観に対して、有機体的生物観を対置し、その原理を『モナドロジー』などで展開している。ライプニッツはモナドの実体性は(無限の変様を)「統一」することにあるとし、それを「実体形相」とも「エンテレケイア」とも呼んでいる(GA26:104)。ハイデガーはこの「活動的力(vis activa)」は「自己自身を目指してある」(das Sich-auf-sich-selbst-anlegen)(GA26:102)としている¹³。

ハイデガーはこのような(あらゆる存在者に共通する)諸力の協働を「衝迫(Drang)」と名づけている(GA26:102, vgl. GA26:102f.)。

衝迫は……さらに付加されるべき他の原因を必要としない。反対に、何らかの眼前存在的な抑制(Hemmung)が無くなること、マックス・シェーラーの適切な表現を用いれば、脱抑制(Enthemmung)のみを必要とする。ライプニッツは「かくしてそれはそれ自身によって作用へともたらされる。それはいかなる助けも必要としない。ただし、妨げを取り除くことのみが必要である」と言っている。ここで意図されていることは「引き絞った弓」を思いうかべればはつきりする。

¹² 以上のような仕方でのロゴスとフォネーの区別は、人間と動物とを対比する西洋の形而上学の典型的な発想法の枠内にある。デリダならば、このように人間に独自とされる思考のあり方をこそ吟味すべきだと主張するであろう。実際、『精神について』においてデリダは、ハイデガーが『形而上学入門』で「世界は常に精神的世界である。動物は世界をもたず、環境世界ももたない」(GA40:48)と述べたことを批判している(Derrida, *De l'esprit: Heidegger et la question*, 1987, 75f.)。

¹³ 「第一に、活動的力は衝迫を意味する。第二に、この衝迫というあり方は、あらゆる実体としての実体に内在している。第三に、この衝迫からは常に遂行(Vollziehen)が生じている」(GA26:105)。Drangには圧迫と意欲という二つの意味がある。ハイデガーはこの語を、何らかのものに迫られて意欲が生じること、何ものかによって駆り立てられてあることを指すのに用いている。

(GA26:103)¹⁴。

ここにおいて、諸力の協働に基づいて、(刺激に対する興奮とその抑制(Hemmung)といった)メカニズムにとらわれないシステムが「時熟」ないし「創発」することが「脱抑制(Enthemmung)」として語られている¹⁵。実際、ハイデガーは「衝迫から時間が生じる」としている(GA26:115)。この衝迫は「アリストテレス解釈」において示唆されていた現存在のあり方を記述したものであるが、動物とても刺激とその反応からなる自動機械ではないのだとすれば、この記述は人間と動物との連続性を示すものとなり、人間と動物との差異化が課題として残ることになる。

それに取り組んだのが『形而上学の根本諸概念』(GA29/30)である。そこでハイデガーが提示するテーゼが「(1) 石は無世界的である。(2) 動物は世界貧乏的である。(3) 人間は世界形成的である」(GA29/30:293 vgl. GA27: 82)である。石は世界の一部をなしており、そこから様々な影響を被る。例えば、「石は暖まる」。しかし、石は振る舞うことはない。これに対して、動物は世界の内にある存在者であり、環境世界に規定されつつ、「振る舞う(Benehmen)」ことができる¹⁶。そのことを示すために、ハイデガーは(シェーラーにおいては世界の開放性を表現するものであった)「脱抑制」という語を用いる(GA29/30: 269ff.)。しかし、動物のあり方は人間のあり方とも異なっている。

動物の振る舞いは、人間が態度をとる場合の「する(Tun)」や「行為する(Handeln)」ではなく、「してしまう(Treiben)」である。このことによって暗示したいのは、いわば動物のしてしまうあらゆることは、衝動的なものによって衝き動かされるというあり方をしているということである(GA29/30:346)。

振る舞いが衝き動かされるものであるため、そこには「とらわれ/朦朧(Benommenheit)」が生じることになる(GA29/30:348)。ハイデガーは、ユクスキュルの環境世界論に影響を受けながらも、その(動物が世界をもつという)「生物学的-動物学的な考察」に対して、動物の世界の欠乏性を主張することで、自らの議論を展開している。さて、人間もまた世界の内にある存在者であり、世界によって規定されるが、それによって衝き動かされるがままにはならないという点において「態度をとる」(Sich verhalten zu …) (GA29/30: 246)ことができる(vgl. GA36/37: 177)。すなわち、或る仕方で出会われているものにそのままとられることもできるし、それを自分とかみあう(sich zusammenhalten)ものとして別様の仕方で覆蔽を開く(entbergen)こともできる(GA29/30:446, 496)。このことによって、人間は世界形成的となるとされる¹⁷。

ただし、『存在と時間』を経由することで、存在を開示するのは Dasein (現存在) そのものではなく、Dasein が Da-sein (現-存在) へと晒されてあることによってであることが明らかになる(GA29/30:414)。存在に切迫するために、人間から(その内なる) Da-sein への接近が試みられる。人間は、確かに、Da-sein に接してはいるが、もはや Da-sein そのものではない。その意味では、もはや「認知モデル」に頼ることはできず、人間の(動物に対する)優位性は確かなものとはいえなくなる。

『存在と時間』は人間の存在理解によって存在の地平たる時間性を析出し、その時間性によって諸存在を語り直すことを試みた。既刊部においては、人間と動物とは隔絶した存在として思惟されていた。しかし、人間の行為とても存在の只中で被投的にのみ生起しうるということを前にして、この構

¹⁴ 「引き絞った弓」の比喩は「スタートラインにつくランナー」という比喩に変形され、アリストテレスに結びつけられる(GA33:27)。

¹⁵ シェーラーは衝動のインパルスの抑制や脱抑制が人間に「自由意志」をもたらすものと考えた(Scheler, Max, *Bildung und Wissen*, 1925, 1947³: 15)。そして、それが「世界開放性(Welttoffenheit)」をもたらすとされた(Scheler, Max, *Die Stellung des Menschen im Kosmos*: 1928, 1991¹²: 40)。

¹⁶ ハイデガーは、「アリストテレス解釈」と『根本諸概念』において、人間と動物と共通するものとして環境世界を考えたが、やがて、動物にそれは動物学者による感情移入だとするようになり、それを人間に限定するに至った(GA46:31)。

¹⁷ 「世界形成的」であるとは 1) 世界を形成すること、2) 世界についての像を描きだすこと、3) 世界を構成することである(GA29/30:414)。

想は再考を余儀なくされた。そこで浮上してきたのが、被投性の観点から時間の生起を考察することであり、「アリストテレス解釈」に見られた「衝迫」の次元に立脚することであった。人間の主体性を棚上げする中で、存在の生起について思惟するという課題は、1) まず、世界内存在というあり方が人間に限定されたものではないという確認から出発する。2) そして、その上で、人間のあり方と動物のあり方が構造的に異なるということ、「脱抑制」のあり方の差異によって示そうとしたのである。

第三節 ハイデガーの動物論の「割り切れ無さ」

ハイデガーは動物との連続性の上に人間の独自の「存在論的なあり方」を示そうとしていた。しかし、この試みは不可避的に割り切れ無さをひきおこしてしまう。

(1) 「とらわれ／開け」の割り切れ無さ

『始元諸根拠』は「本来的にあるもの」としてのモノダのあり方を「脱抑制」という概念と結びつけて解釈していた。シェラーのこの考え方には、動物が外界との間に刺激と反射からなる関係性を形成するのに対して、人間はそのような関係性に閉じ込められず、世界解放性をもつという思想が認められた。しかし、ハイデガーはユクスキュルの議論から抑制／脱抑制を別様に解釈するようになる。ユクスキュルは筋肉の弛緩をとまなわな抑制から弛緩をとまなう抑制を区別するよう指摘している¹⁸。後者は単純な刺激に対する自動的な反応を抑制することで、それとは別な行為を可能ならしめるものである。実際、環境からの刺激に対する自動的な反射的抑制を制御する抑制／脱抑制は生物にとって普遍的な現象なのである¹⁹。そして、抑制／脱抑制は、単純な刺激と反射という機構にとらわれないシステムが創発することを意味することになる²⁰。これこそ、ハイデガーが刺激に対する反射の抑制の無効化という意味で用いてきた脱抑制に外ならない(GA29/30:353, 369, 372, 391)。しかし、そうになると、動物と人間との対比が不分明になってしまう。そこでハイデガーは動物における「脱抑制」は機能環に閉じ込められたあり方であると「改釈」する。だが、人間が、機能環から逸脱することができるのだとしたら、それは機能環に閉じ込められたあり方における衝迫をさらに抑制することができることによるということになる²¹。しかし、このように考えることは、「脱抑制」の水準が異なるにしても、動物も人間もともに「脱抑制」によって世界の開放性に与るという解釈をもたらし、逆に、人間と動物との区別の不可能性を示しかねない。

(2) 「存在者の開示／全体としての存在者の開示」の割り切れ無さ

動物が機能環にとらわれ、その中で開示される存在者にしか遭遇することができないのに対して、人間はその存在者の存在を開示することができ、それを命題として言い表すことができるとされる²²。

¹⁸ Uexküll, Jacob von, *Umwelt und Innenwelt der Tiere*, 1921²: 124. 「抑制的反射(Hemmungsreflex)」は、例えば、クラゲの泳動が海面上に出た場合や強い光によって抑制されるような場合である (Uexküll1921:70)。「補助的抑制(Unterstützungshemmung)」とは筋肉への収縮刺激がある局面で、負荷に見合った力に調節できるように、その収縮をいったん抑制する機構である(Uexküll1921: 142f., 186f.)。また、かすかな酪酸によって木から落下するマダニは『始元諸根拠』における「脱抑制」の条件をよく満たしている(Uexküll, J. v., *Streifzüge durch die Umwelten von Tieren und Menschen*, 1934: 55)。ローレンツは「進化論的認識論」の発想を発展させているが、衝動的抑制の抑制を Ent-hemmung と呼び、広範囲の動物に見られるとしている。また、彼は解除(Auslösung)、スパーク(Fulguration)といった比喩も用いている (ローレンツ『鏡の背面』(2017): 124, 266)。

¹⁹ 遺伝子の発現を抑制することで発生が可能になるが、その抑制は環境によって規定／調整される。ギルバートらはほぼすべての真核生物は環境による表現型可塑性をもつとしている (ギルバート, イーベル『生態進化発生学』2012: 10)。

²⁰ ミルであればこれを heteropathic と呼ぶであろう。

²¹ ハイデガーは人間による企投が「とらわれ」と異なるのは「企投の取り去り(Fortnehmen)は、可能なものの中への解き放ち(Entheben)という性格をもっているからである」(GA29/30:528)としている。しかし、ここにも「脱抑制」が見られる。だからこそ、ハイデガーは人間の「解き放ち」と動物「脱抑制」との区別に腐心する結果になっている(GA29/30:528)。

²² 「明示的ロゴスは、指し示したり(Zuweisen)、それを差し控えたり (Wegweisen) するという仕方で、

しかし、「存在者を存在者として開示する」とはいかなることかを考えようとするとき、この区別が自明とはいえないことに気づく。1) まず、世界の中で存在者に会うことそのものが事態の開示をともなっている。例えば、生物が他の生き物を捕食者としてとらえ、そこから逃れようとするものの中にはすでに事態の開示が含まれている。存在者に会うことは常に既に文脈の中で会うことである。このような意味での事態の開示だけであれば、動物と人間との世界のあり方の差異を析出しているとはいえない。2) また、ハイデガーは多様な可能性の中に巻き込まれてしまうことに人間の「開け」の独自性を見ている²³。しかし、ユクスキュルは動物が同じ対象を気分によって別のものとしてとらえるとしている²⁴。3) それでは、新たな世界を切り開くことができるという点に違いを認めることができるだろうか。しかし、動物もまた世界との関わりにおいてを命をかけた試行錯誤を行い、新たな世界を切り開いているといえるのではないか。そもそも、動物が大抵の場合、世界形成的ではないのと同様に、人間もまた大抵の場合世界形成的ではない。ハイデガーは意識によって人間を特徴づけることを回避し、認識を他の存在者との関わり方として考えようとしていたが、そうすればそうするほど、人間と動物の差異は自明とは言えなくなってくる²⁵。

(3) 「有機体／自己」の割り切れ無さ

ハイデガーは有機体を衝迫の連鎖によって有能性を実現するあり方として理解する(GA29/30:335)。そして、有能性とは「何らかの仕方で[全体を]踏査しつつも衝動的に自らを前へ押し出す(Sichvorlegen)ことであり、押し出しながら、独自の〈何のため(Wozu)〉の中へ、すなわち、自分自身の中へと、自らを前へと押し出すことである」とし(GA29/30:339)、「自己固有的(eigen-tümlich)」であるとする(GA29/30:340)。しかし、だからといって、動物の自己性を人間の自己性と同様なものとして理解してはならないと主張する(GA29/30:332, 340)。なるほど、これは動物のあり方を感情移入によって歪めてしまうことに対する批判である。しかし、人間の「自己」は「主観、意識、自己意識」

明示的に覆蔵を開くこと(Entbergen)と覆蔵すること(Verbergen)との「あれかあるいはこれか」への能力である。このように明示することにおいて、「～である(ist)」(存在)が何らかの意味において表現へともたらされる」(GA29/30:489)。vgl. GA29/30: 464, 468, 480ff.

²³ 「[拘束性に向き合うこと(Entgegenhalten)、全体化すること(Ergänzung)、存在者の存在の露呈(Enthüllung)という]この三重のことは、特有の仕方で統一するような根源に根ざしているが、このようなことはいかなる意味においても動物には見られない」(GA29/30:509)。人間は、単なる存在者に関わるだけでなく、存在者を支えているものに対する眼差しをもつことができ、存在に遭遇することができるのである。ただし、このような企投は「自らをありうる諸拘束へと解き放つこと」(GA29/30:529)であった。「可能なものへの光をあてること(Lichtblick)によって、企投するものは「あれか-これか(entweder-oder)」、「あれも-これも(sowohl-als-auch)」、「そのように」と「別様に」、「何である」、「～である」と「～でない」という次元に向けて開かれる」(GA29/30:530)。同じ存在者に、全体との関連のもと様々な可能性をばらむものとして、遭遇してしまうことが、人間と動物との差異を支えているとされる。

²⁴ ユクスキュルは「イソギンチャクの意味はヤドカリの気分によって変化する」とし、イソギンチャクが、殻に付着している場合には「保護物」として維持され、住居が奪われている場合には「住居」として利用され、絶食中であれば「餌」として摂食されると指摘している(Uexküll1934: 55)。感覚器官によって同じと見なされるものが、生物のおかれた状況によって、別の作用を誘発するものとして受け止められるのである。また、高度な動物の脳の神経回路は常に変化し続ける。「機械論的生物学は神経システムの組織を自己完結したメカニズムのように論じる。だが、より高次な動物の脳のメカニズムが常に閉じられているわけではないということは否定できず、まさにここ[脳]において、原形質は経路を形成することで再構築を一生続けるということを認めざるをえない」(Uexküll1921:48)。

²⁵ 『存在と時間』において、覚悟性は、自らのあり方を全体性においてとらえ、先駆するという仕方で企投することを意味した。しかし、やがて、これは人間の意志によって遂行されるものとしてよりも、状況(Dasein)において遂行されるものとして理解されるようになっていく。ここには「存在論的なあり方」の「認知モデル」から「構造モデル」への移行が見られる。だとすれば、動物が被投的企投しつつ世界を切り開くあり方に時間性を認めることができるのではないか。

(GA29/30:339)として規定されることで、自明とされてしまっている。むしろ、人間の「自己」を有機体として問い直すことが必要となる。動物の有機体が器官を介して環境と絡み合いを形成し、その中で諸活動が成就するのと同様に、人間もまた（他の人間や事物を含む）環境と絡み合いを形成している。なるほど、人間の活動の中には意識的な行為が含まれているが、それは環境や他者との絡み合いの中で遂行される営みのごく一部でしかない。そうすると、人間の「自己」のみを通して人間の「自己固有性」をとらえてはならないということになる。私たちは生物を個体としてみる習慣をもっている。しかし、ハイデガーにおいて現存在とは共存在であり、その開示は他者との共存在の中で遂行されるようなものであった。だとすれば、Daseinは個体ではなく、諸個体との関係において成就されるものということになる。そうすると、現存在を例えば、「総かり立て体制(Ge-stell)」という有機体の器官と見なすことも不可能ではなくなる。実際、ハイデガーはDaseinをDa-seinと表記するようになり、存在の歴史との関係で思惟するようになった。有機体と自己との差異も自明なものとはいえない。

第二章 生物学者は何を思惟してきたか？

この章においては、ハイデガーが生物学をどのように受容したのかを検討する（第一節）。そして、その受容の限界を指摘することを通して、生物学が何を問題にしてきたのかを照らし出すことにする（第二節）。

第一節 ハイデガーにおける生物学の受容

すでに見たように、ハイデガーは、哲学が諸存在について思惟することができる点において、自然科学に対して優位をもつと考えていた。基本的には生物学についても同様である²⁶。しかし、彼は生物学に対しては例外的なことも述べている。

たしかに、偉大な研究者であるカール・エルンスト・フォン・ベアは前世紀の前半において、近代的な哲学や神学のやり方にくるまれてはいたが、本質的なものを見た。しかし、彼の業績とその影響は間もなく、ダーウィニズムと、形態学や生理学における、ひたすら分析的に分解していく方法論によってないがしろにされ、埋もれさせられてしまった。(GA29/30:378)。

ハイデガーは、フォン・ベアが発生における環境の役割に注目したことを高く評価しながらも(SZ: 58)、それ以降の生物学は自然科学の分析的な手法をとり、「本質的なもの」を継承することができなかったとする。例えば、「発展説(Entwicklunglehre)」（進化論）は、動物を環境に適応する機構と見なしているため、動物に固有な世界のあり方を捕らえていないと批判している(GA29/30:402)。しかし、その後も「自然科学と呼ばれる科学全体の中で、今日、生物学は、物理学と化学との専制に対して自らを守ろうとしている」(GA29/30:277)とし、そのことを「有利な状況」と評価している。彼が「生物学における本質的な二歩」として評価するのが、ドリーシュとユクスキュルである。

まず、ドリーシュは1891年にウニの卵割実験から、卵割の初期の細胞は相互の位置関係によって発生のあり方を変える調整能力をもつことを示したが、ハイデガーはこの考え方を高く評価している(GA29/30:381)²⁷。ドリーシュの着想は、器官と環境との絡み合いにおいて有能性が成就するという、ハイデガーの有機体の考え方とも親和的である(GA29/30:342)。ただし、ハイデガーは、ドリーシュが有機体の原理をエンテレヒーとして理論化しようとしていることに対しては批判的である。というのも、エンテレヒーという概念は実体化されると旧来の生氣論や目的論の再来をもたらし、有機体の分析を後退させてしまうと危惧するからである(GA29/30:381f.)。

そして、ハイデガーが二人目として言及しているのがユクスキュルであり、彼が有機体と環境との絡み合いをより広範な仕方ととらえようとしたことを評価している(GA29/30:380ff.)。そのことを表し

²⁶ 例えば、GA18:74, GA21:215f., GA24:70, GA29/30:283.

²⁷ ドリーシュは1907/08年にギフォード講座講演を行い、『有機体の哲学』を出版し、哲学者としてのキャリアを開始する。ハイデガーはドリーシュに哲学者としてしばしば言及していたが(GA56/57: 27, GA59: 36, GA61, GA21:29)、『根本諸概念』において初めて彼の生物学での業績に注目している(GA29/30:380f.)。

ているのが、機能環(Funktionskreis)の考え方である。それによれば、生物は「受容器」と「効果器」を介して環境と独自の関係性を形成し、知覚も行動もこの回路の中で行っている。ただし、機能環は、刺激と反射といった機械的な関係のみからなるのではなく、あえて、そのような機械的な関係を抑制することで、より複雑な反応をできるようにする機構も備えている。ハイデガーは、シェーラーにおける「脱抑制」という概念をユクスキユルの考え方をういて解釈し直している。ただし、ハイデガーはこのような機能環ないし脱抑制の環を「認知モデル」によって擬人化して理解してしまうことを批判している。

以上において見てきたように、ハイデガーが三人の生物学者において評価しているのは動物を環境との関係の中で考えている点である。そして、この論点は、既に見たように、ハイデガーが動物のあり方を思惟する際の強調点と重なっている。しかし、存在について思惟しようとするハイデガーはこのような動物のあり方に飽き足らず、世界形成的な人間のあり方をそれに対比させねばならなくなる。だが、環境との関係はスタティックな構造として理解されているため、世界の形成はもちろん、生命に固有な生成といったあり方も捉え損なうことになる。ハイデガーは「人間の存在論的なあり方」を明確化することを目指す余り、生物学に見られる「存在論的なあり方」の「構造的モデル」を見過ごしてしまう。

第二節 生物学者は何を思惟してきたか？

フォン・ベアの発生学は実際の所、生命の存在論を考えることを回避していたのだろうか。発生学は、卵という比較的均質なものから分化した組織がどのようにして生成するのかを研究する。遺伝の仕組みが解明されるのは20世紀になってからであり、当時の発生学においては前成説(卵の中にその後の組織が縮小された仕方で存在する)と後成説との対立が問題になっていた。胚の形成が観察されるようになったヴォルフ以降、器官が単独では成立しないことが明らかとなり、後成説が有力となっていく。フォン・ベアは、特殊な性質はより一般的な性質から分化するとし、高次な生物であれ、低次な生物であれ、発生初期の胚は相互に似ていると指摘した。だが、その場合でも、どのようにして分化が可能となるのかが問題となる。つまり、後成的な発生といえども何らかの指令によって管理されているのでなくてはならない。その際、彼が発生を進める卵の中の力として注目したのが、脊索による神経管の誘導であった。つまり、胚をとりまく環境こそが個々の分化を進めるのであり、分化は「手順」の中で行われるというのである。フォン・ベアは、生命を導く力を「向目的性(Zielstrebigkeit)」と呼んでいるが²⁸、それはボトムアップの秩序の生成であり、何らかの目的論的実体を考えていたわけではない。

フォン・ベアに始まる発生学の流れを受け継いで、ドリーシュはウニの卵割の実験から、卵割の初期の細胞は相互の位置関係によって発生のあり方を変える調整能力をもつことを示した。ルーの実験によれば、二細胞期の胚の一方の細胞を殺すと、半胚が得られる。これに対して、二細胞期の胚において一方の細胞を分離しても、完全な成体が得られる²⁹。この成果から、ドリーシュは(細胞の隣接関係という)環境との相互関係の中で、原形質の分化が生じると考えた。ドリーシュはこのようにことを可能にする原理をエンテレヒーと名づけ、生氣論(Vitalismus)を主張するに至った(Driesch 1908: 144)。しかし、ドリーシュのエンテレヒーを実体的なものとして理解するのは早計である。ドリーシュの生氣論は機械論に対する批判を意図したものではあったが、かつての自然哲学におけるデカルトやド・ラ・メトリのような機械論とアリストテレス的な生氣論との対立は、自然科学としての生物学ではもはや問題ではなかった。単なる機械に還元できない生命現象を魂といった原理を前提とすることなく説明することが共通の問題意識となっていた。

ドリーシュは『生氣論の歴史と理論』においてアリストテレス『動物発生論』における胚の分化の記述に注目する³⁰。そして、「アリストテレスは様々な観察から、胚の部分はすべて同時に存在するわけではなく、徐々に成立することを知っていた。それゆえ、彼は現代的な言葉を使えば「後生学者

²⁸ Wolf は vis essentialis を、Blumenbach は Bildungstrib を想定した。

²⁹ Driesch, Hans, *Science and Philosophy of the Organism*, 1908: 60.

³⁰ Driesch, Hans, *Der Vitalismus als Geschichte und als Lehre*, 1905: 11.

(Epigenetiker)」であった」(Driesch1905: 13)と指摘している。胚の中にある差異が新たなものを生み出すという時間的な連鎖が生物を生み出すというのである。ドリーシュのエンテレヒーという概念はこのようなアリストテレスの考えにならったものなのである。それは、環境のもと秩序を形成する手順であり、物質から独立してあるような実体ではない。

ハイデガーはドリーシュのエンテレヒーを実体的なものと批判していたが(GA29/30:325)、以上のような考え方はハイデガーの現存在の概念と遠いものではない。『魂について』においてアリストテレスは「心とは「可能的に生命をもつ自然的物体の第一の終局態(エンテレケイア)」である」(412a27)と述べているが、ハイデガーはそこから生命の存在は環境との相互作用においてその可能性を實現し、自らのあり方を表明的にするとしている。可能性を十全に働かせていることがエンテレケイアなのである。ハイデガーはこのような考え方を受容し(GA18: 90, 214, 295f., GA40:64f.)、人間は単にロゴスをもつというだけでなく、その生は魂の現実態としてあるとする(GA18: 43)。ハイデガー自身がアリストテレスの生命論から彼の動物論を考えたが、だからといって、現存在を眼前存在と見なしたわけではない。また、『根本諸概念』においては現存在をモノドを通して理解しようとしたが、モノド(エンテレケー)を形相実体として認めていた。

ユクスキュルは環境世界の概念と結びつけて理解されてきた。しかし、彼は『動物の環境と内的世界』を「原形質問題(Protoplasmproblem)」から始めている。これは原形質という同質的なものから、生物の多様な部分が分化していくことを考えようとするものであり(Uexküll1921:11)、彼はそれを推進するものを「超機械的能力(übermaschinelle Fähigkeit)」と呼んでいる(Uexküll1921: 22)³¹。ユクスキュルもまたこの問題を考えるにあたって、フォン・ベアから手がかりを得ている。

動物や植物はメロディーと同じ仕方で生じる、とカール・エルンスト・フォン・ベアは言っている。それらは単に機械のような空間的統一を形成するだけではない。それらは時間的統一でもある。(Uexküll1921: 23)

すなわち、生体と環境との関係の継続的な変化の中で生物の均衡的構造が生じるというのである³²。ハイデガーはユクスキュルを環境との関係において生物を考えていると評価するが、それにとどまらず、ユクスキュルは時間の中においても生物を考えようとしていたのである。このような構造の創発は人間の悟性にとっては「奇跡」としか言い様のないものであるが、自然界においては「試行錯誤(Versuch und Irrtum)」において成就するとされる³³。

ユクスキュルはこの著作において諸動物の環境世界について論じているが、その配列は原始的と考えられる動物からより高次の動物へと並べられており、その意味では諸環境世界の分化を取り扱っている。しかし、分化によって形成された機能環は徐々に分化を制約するようになる(Uexküll1921: 11)。そうなると、機能環は閉じたものとなるように思われる。しかし、それが完全に閉じられることはない。「原形質の生物学的任務は、固定化した構造が成立して、恒常的になりがちな反射機能を柔軟なものにし、それが環境(Umgebung)の影響の変化に対処できるようにすることである」(Uexküll1921: 57)。ここにおいて、ハイデガーによる機能環の理解が不十分だったことが明らかになる。動物においてすら機能環は閉ざされておらず、状況によって新しい反応を惹起しうるのである。

一方において、ハイデガーは、フォン・ベア、ドリーシュ、ユクスキュルといった生物学者から

³¹ 「ドリーシュはこの自然要素をアリストテレスに拠って「エンテレヒー」と名づけたが、カール・エルンスト・フォン・ベアは「向目的性(Zielstrebigkeit)」と名づけた」(Uexküll1921: 10)。

³² 「原形質の構造形成におけるあらゆる個々の働きを規定するのは、現存する構造ではなく、発生する構造である。すでに形成された構造は原形質の構造形成作用を抑制するだけである。これに対して、未だ現存していない構造が構造形成を導く」(Uexküll1921: 23)。「反対に、動物の設計図(Bauplan)は環境(Umgebung)からの影響のもと継続的に変化していく、したがって、誇張して言えば、同じ動物であっても二度と同じ刺激はありえないということが出来る」(Uexküll1921: 20)。その結果、「設計図がこのように継続的に変化することによって、生命は常に再形成するという流動的な性格をえ、動物は広い範囲において恒常的に適応できるようになる」(Uexküll1921: 20)。

³³ Uexküll, Theoretische Biologie, 1928 :97ff., 221ff.

自らの思索の手がかりを得ていた。しかし、他方において、彼らに通底する原形質問題や発生説を適切に評価することができなかつた。生物学者は分化を考えてきたが、ハイデガーはこれを見過ごすのである。その背景には、ハイデガーが現存在における開示を強調するあまり、それ以外の存在者による「世界形成」の構造を適切に評価できなかつたことがあるように思われる。世界と時間の切り離すことのできない関係性を検討することが必要となる。しかるに、同じようにフォン・ベーアからインスピレーションを得て、「分化(differentiation)」を基本原理として諸領域の生成を主題化したのがスペンサーであった。ハイデガーはかつて交錯した道に10年の時を経てそれと知ることなく再近接している。

第三章 生物学は哲学に何を思惟させたか？

スペンサーは『総合哲学の体系(System of Synthetic Philosophy)』(1862-1897)において進化という観点から諸科学の知見を体系化することを試みている。彼はその基本となる発生的発想をフォン・ベーアから学んでいる。フォン・ベーアは『動物発生学』において彼の主要な主張を四つの命題としてまとめているが、その中で、最も影響力をもったのが「形態関係の最も普遍的なものからそれほど普遍的ではないものが形成される。そのような形成は、最後に特殊なものが現れるまで継続する」であった。彼は、このような分化こそが自然の「根本思想(Grundgedanke)」であるとして、生物の世界のみならず、宇宙の生成をも統べていると述べている³⁴。スペンサーは1851年にカーペンターの『一般及び比較生理学原理』からフォン・ベーアについて学んでいる³⁵。スペンサーはすでに『社会静学』において社会が均質なあり方から分化したあり方へと進化することを論じていたが、同様な発想が生物の領域にも見られるということを知り、物質、生物、社会、倫理といった諸領域を「発展」という観点から統一的に記述するという構想をえた(Spencer 1904: 384f., 406)。この構想を形にしたものが「進歩：その法則と原因(Progress: its law and cause)」(1857)である。

ヴォルフ、ゲーテ、フォン・ベーアの研究は一連の変化が…構造の同質性から構造の異質性への進行をなしているという真理を証明した。あらゆる胚は、最初の段階においては、組織においても化学的組成においても全く一様な物質からなる。最初の一步はこの物質の二つの部分の間の差異の出現である。生理学の用語では、この現象は分化(differentiation)と呼ばれる。やがてこれらの分化した部分の各々にもまた対比が見られるようになる。そして、次第に二次的な分化は最初の分化と同様に明瞭となる。…最終的にはこのような無数の分化によって成体の動植物を構成する組織や器官の複雑な組合せが生じる。(Spencer, "Progress: its Law and Cause", Essays Vol.1, 1891, 9f.)

例えば、星雲であれば、物質の運動が大きい間は、様々な物質が入り交じっており、均質的な状態にある。しかし、物質が引力によって集まり始めると、その均衡状態が崩れて、徐々に物質が集中し始め、物体が生じることになる³⁶。環境の微小な差異によって分化が始まり、その変化がさらなる分化を推進するというのである。このように進化においては新しい性質が創発することになる。そして、環境による分化は様々な領域に適用可能な原理であると主張している(Spencer 1891: 10)。

『生物学原理』は生物に見られる諸現象をこの原理によって説明しようとする。例えば、細胞が増殖していくと、中心と周辺で環境の違いが生じ、そのことによって外壁と内部という風に細胞の機能が分化していく。そして、そのような分化によって、生物は外的環境から独立した内的環境をもつことができるようになり、個体としての自律性を備えるようになる³⁷。ただし、機能や構造が分化するだけでは生命は崩壊してしまう。分化していったもの同士が調和がとれるように統合される必要がある。部分相互の連携を行い、機能を維持するための部分が必要となる(Spencer 1864: § 59)。例えば、活動

³⁴ Von Baer, *Über Entwicklungsgeschichte der Thiere*, Vol. I, 1828: 263f..

³⁵ Spencer, Herbert, *Autobiography Vol. I*, 1904: 384, Carpenter, William Benjamin, *Principles of General and Comparative Physiology*, 1839.

³⁶ スペンサーは翌年の1858年に「星雲仮説(The Nebular Hypothesis)」という論考を発表し、この論考は後に『第一原理』に取り込まれることになる。

³⁷ Spencer, Herbert, *The Principles of Biology*, Vol. I, 1864: § 50.

はエネルギーを消費してしまうため、消費されたエネルギーを補充する必要がある。そこで、エネルギーを運搬する部分が生じてくることになる(Spencer1864: § 56)。また、各部分の活動を調整する神経系のような仕組みも形成される³⁸。

神経系の進化と並行して、心の進化もまた生じる³⁹。スペンサーは心の構成要素を感じ(Feeling)であるとしている(Spencer1870: § 64 165)。それはさしあたり神経系が作用しており、その作用が看取されていることと解釈することができる。感じは、(中枢でおこる)情動(Emotion)と(末梢でおこる)感覚(Sensation)とに区別される(Spencer1870: § 41 99)。そして、それは共存するとともに継起し、様々な心的現象を引き起こす。感覚の感じは、共存と継起に従って整理され、そこから、対象やそれらの関係さらには時間や空間といった観念が形成されるとともに(Spencer1870: § 69ff.)、その組合せから認知(Cognition)が生じる(Spencer1870: § 211 476)。感覚が互いに結びついていくのと同様に、情動もまた互いに結びつき、やがて心と環境とのやりとりが意識されるようになる。このようにして、環境との絡み合いの中で「感じ」として心の領域が形成されるとともに、それと相関して「感じられるもの」として環境も表象・知覚されるようになる。

スペンサーの『総合哲学体系』は、一方において、認識されるべき世界の諸対象が生まれてくる進化を記述している。環境からの影響下において同質的なものから異質的なものが分化していく。そして、他方において、有機体が環境との間に相互に噛み合う関係性を形成していく進化をも記述している。生物はそのつどの環境のもとで様々な試行錯誤を行い、うまくいくやり方が生き残る。その過程の中で、生物はやがて環境とうまく関わるよう知覚や意識といった機能を発達させるというのである。

このような試行錯誤の過程があるからこそ、生物の認識は環境ときちんと絡み合うことができる(Spencer1870: § 234 539)。環境への適応とは生物と環境の間に対をなすような関係性が成就することなのである⁴⁰。ここにおいて、ユクスキュルの言うような機能環が成立することになる。スペンサーにとって、認識とは脳や神経系が行うものではなく、有機体が巻き込まれた環境との相互作用の中で成就されるようなものなのである。スミスはスペンサーのこのような考え方を「発生学的認識論」と呼んでいる⁴¹。

「発生学的認識論」は思考の領域にも当てはまる。分化が環境の中での創発であり、その環境への適応であるならば、科学による認識も環境の中で生きるすべを発見するとともに、世界の生成に参与することである。科学的世界像は「実在」と「認知リソース」による「共同作品」なのである。このような意味において科学の発展は実在の現象のあり方を多様化させるものであり、科学もまた世界の生成に参与しているということになる。スペンサーの『総合的哲学体系』は、単なる学問論にとどま

³⁸ Spencer, Herbert, *The Principles of Biology, Vol. II*, 1967: § 302.

³⁹ Spencer, Herbert, *The Principles of Psychology, Vol. I*, 1870², § 76: 191.

⁴⁰ この考え方を拡張すれば、諸事物が相互関係の中でおこる、システムの形成すら原初的な認識と見なすこともできるかもしれない。また、認識とは環境を受動的に看取するだけのことではない。生物の側の認知能力の向上は、対象となる環境を観察する際の観点を生成させることであり、環境に対する働きかけでもある。そのことによって、環境そのものもまた新たな相貌を示すことになり、生物の側もこの新たな相貌を認識しようとしてさらなる進化を遂げることになる。例えば、アンドリュー・パーカー『眼の誕生』(2006)によれば、カンブリア紀における眼の誕生は捕食者に有利な状況を生み出し、そのような環境に適応すべく、被捕食者は外殻を強化した。生物の進化は環境を一変させるのである。

⁴¹ Smith, C. U. M., "Herbert Spencer's Epigenetic Epistemology", in *Studies in History and Philosophy of Science, Vol. 14*, No.1, pp1-22. ポパーであれば、これを「進化論的認識論(evolutionary epistemology)」と呼ぶであろう。「主観主義的認識論」が認識の出発点として「直接的な」観察体験を選ぶのに対して、「進化論的認識論」は「あらゆる獲得された知識、あらゆる学習は、以前に存在していたなんらかの形態の知識ないし性向の、そして最終的には生まれながらの性向の、修正(廃棄)からなる」と主張する(Popper, Karl, *Objective Knowledge: An Evolutionary Approach*, 1972: 71f.)。ポパー自身はこの着想に基づき、科学の進化を諸理論の間の生存競争として理解しようとした。彼はこの発想を創発主義者であるロイド・モーガンに由来するものとしているが、スペンサーこそ創発主義者の源泉の一つであった。

るのではなく、諸科学の知見を哲学によって総合することで、「知りえないもの(the unknowable)」にアプローチする営みなのである。このように、「発生学的認識論」の立場からすれば、生物学はもちろん学問はそれ自体において創発的であり、「存在論的なあり方」をしていることになる。そして、このような人間の「存在論的なあり方」もまた生物における構造的な「存在論的なあり方」の延長線上にあるものであるということになる。

終章 「存在論的なあり方」はいかにあるか？

ハイデガーは、生物学は生命の存在論を思惟しえないと批判していた。しかし、ハイデガーが言及している生物学者たちの考えによれば、生命の本質は環境に直面する中で分化を遂げるとともに、新たな環境を切り開いていくことにあった。その意味で生命は本質的に世界形成的なあり方をしている。そのような生命と環境との試行錯誤的關係の中で、動的な平衡状態が成就するとき、生命の自己性が成立することになる。このような生命の存在は単一の出来事ではなく、複合的な関係性の中での諸力の平衡としてある。たとえば、生命が存続し続けているだけであったとしても、それは自己のあり方が常に変様する環境の中で引き続き機能することを、身をもって実証しつづけているのであり、常に時間的なあり方をしている。このようなあり方は Dasein の時間性に相当する構造を備えており、「存在論的なあり方」をしているということが出来る⁴²。そして、このような生命と環境との入り組んだ関係性を目の当たりにして、生物学もまたいやおうなく「存在論的なあり方」の構造について考えざるをえず、「発生学的認識論」の着想をスペンサーやポパーのような哲学者にもたらしたのである。

ここにおいて、ハイデガーが、動物と人間の差異を強調する中で、動物における「時間性」を見過ぐすとともに、生物学の思惟の主題をとらえそこねていたことが露わになる。そもそも、ハイデガー自身が生物学から刺激を受けて、存在論のあり方について思惟しながらも、その影響関係を否認することで、自らの存在論を際立たせようとしていたのであった。だとすれば、ハイデガーによる生命論を発生学的作用影響史の中に位置づけることができるのではないか。そのように解釈することで、ハイデガーの動物論の「割り切れ無さ」を整理する枠組みが得られるのではないか。

ハイデガーは動物／人間、存在者／存在、あるいは、非本来性／本来性という二項対立の中で思惟した。一方において、このことは「割り切れ無さ」を生み出すことにつながった。例えば、本来性を日常性から峻別する『存在と時間』の構想は決意性の空疎化・形式化を招いてしまった。デリダも批判するように、混淆は避けられず、それどころか、それこそが存在のあり方を示すものなのである。だが、他方において、この図式性こそが更なる思索を促すともいえる⁴³⁴⁴。例えば、(1)動物／人間という対比から、動物の人間的な側面として世界内存在を見だし、逆に、人間の動物的な側面として日常性を位置づけることができるであろう。(2)また、生物学と哲学とを対比することによって、哲学の課題を生物学に対して明確化すると同時に、哲学が見落とすことになるものを生物学の中に読み取ることが可能にする。すなわち、人間のみを世界形成的として特権化することは、逆に、生物学が状況の中での分化として思惟してきた事柄を際立たせることになり、かえって哲学の限界を告知する結果になっている。このように二分法の反復は存在に切迫する手法なのであり、ハイデガーの思索の遍歴自身が「発生学的認識論」の一つの事例となっているのである。

⁴² ハイデガーは存在者としての存在者について、存在者を存在者たらしめるものについて語り出す言明のみが「存在論的」であるとしている(GA29/30: 521)。

⁴³ もともと、ハイデガー自身がこのような二分法的思考法に親和性をもっていた。例えば、「アリストテレス解釈」において、ロゴスを「おおよそ」のあり方の反復によって根源的なものを見いだすことと説明し、ドクサにおける思索の深まりについて論じている(GA18: 37ff.)。

⁴⁴ 脱抑制という概念は『始元諸根拠』においてはモナドのあり方を特徴づけるものとして積極的な意味を与えられていたが、『根本諸概念』において、この概念は動物のあり方に限定され、世界形成的ではないあり方を特徴づけるものとして再利用されている。ハイデガーは存在を思惟するために様々な手がかりを利用するが、そこから存在についてなにかのしるしをたると同時に、その手がかりは不十分だったと述べることになる。ここにハイデガーにおける「野生の思考」を見ることが出来る。

^{エピステメー・ピュシケー}
自然学においては「生そのものとは何であるか、魂とは、生成と消滅とは、生起そのものとは、運動とは、場所とは、時間とは、……空虚とは、この全体における運動するものとは、最初の動かすものとは、何であるか」が問われる(GA29/30:49)。したがって、生に関わる問いはピュシスの存在論を必然的に伴う。この議論は古代ギリシアの哲学を範例としたものであり、近代の自然科学となった生物学にはすぐには当てはまらないであろう。しかし、生物学は、近代になって自然哲学から自然科学へと変貌する中であっても、近代の自然科学のあり方に対する批判を保っていた。そして、スペンサーは、生命のあり方の考察から出発して、あらゆる領域のあり方を分化という観点から分析することで、「知りえないもの」への接近を試みることができた。近代であっても、生物学には存在を思惟させる契機をはらんでいたのである。ハイデガーと生物学とは「存在論的なあり方」をどの水準で考えるかにおいて路を異にしつつも、同時に、極めて類似した着想を押し進めてきたのである。若きハイデガーが一瞥した問題は10年の歳月とその間の思想的変化を経てもなお残る「近さ」を保っていたとすることができる。